

# 薬物依存症者の回復をサポート

IARSA

## 日本初の治療共同体設立へ

県立友部病院副院長ら

全国に100万人いると推定される薬物依存症者。その人たちの社会復帰や回復への支援は、まだ十分で、努力も困難な状況だ。これまで薬物依存症者の回復支援を推進してきた県立友部病院の中村憲副院長は、薬物依存症者のための施設「茨城タルク」の推進責任者として、6月、日本初の茨城型治療共同体・NPO法人「茨城依存症回復支援協会（IARSA）」茨城・アナイクション・リカバリー・サポート・アソシエーション（リカバリー・サポート・アソシエーション）を設立。医療機関やタルク、家族会、行政、警察や司法機関などとの連携の下、薬物依存症者の回復への支援をサポートするネットワークを構築することを目指す。

（福田久美子）



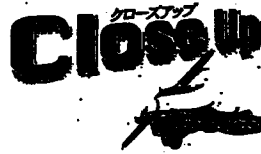
県立友部病院の中村憲副院長。左側が同市東町の副市長

### 安心、ゆつくりと社会復帰・就労支援

■薬物問題の現状  
県精神保健福祉センターや各医療機関に寄せられた薬物問題の相談は、年間4000件（2000年時）に達している。相談件数は2000年、大塚が80件、シンナーなど看破薬剤案件、プロパンガスやリキンドなどの違法ドラッグが22件であった。

■県内での発生状況  
県内の発生件数は、2000年（年間）は1177件、2001年（年間）は1400人台で推移し、やや減少傾向を示している。

が大麻や合成麻薬「MDMA」なども麻薬類用の捜査数は、00年より約半増加して



精神保健福祉センター、保健所などが本人や家族からの相談を受け、治療支援を行い、県内のタルクなどの回復施設がリハビリを通う過程の「茨城方式」で、薬物依存症者やその家族のケアを行っている。県内外に知られている。回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ

で薬物に手を触れ、使っているうちに精神障害を誘発する人もいる」という。しかし「薬も多いのは、社会に流通している人がたまたま薬物依存症になるケース」だと話す。

「今後はこの治療共同体を、社会状況に合わせて徐々に広げていく方針だ」と中村副院長は話す。

「回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ

「回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ

おび、特に20代を中心に拡大している。最近では、ネットや携帯電話などから違法ドラッグを購入し、手に入れた薬物依存症者の増加が懸念されている。生活保護受給者や低所得者から回復支援を受ける人々も増加している。

「回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ

「回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ

「回復支援は、薬物依存症者者の治療に携わり、設立準備委員会事務局を兼ねる中村副院長は、薬物問題について「もともと薬が好まれない人も少しはいるが、統合失調症などの病気がきっかけ